



中遠の古刹 真言宗西楽寺 II

高平山

袋井市歴史文化館 令和2年度企画展

袋井市春岡に所在する、真言宗の古刹、安養山西楽寺。

西楽寺には、江戸時代から明治に至る、4000点余りの古文書が残されています。

西楽寺文書を、4つの重要なテーマで紹介する、全4回の展示シリーズ。第2回は、西楽寺の奥院、高平山遍照寺（森町飯田に所在）を紹介します。テーマは、西楽寺と地域との関わりです。

高平山の史料は、西楽寺文書中に残されているものが唯一です。今回の調査で、高平山に関する新たな知見が得られるとともに、高平山が、西楽寺の、地域と関わる活動や、遠州における活動の拠点であることが分かりました。

高平山には、東海地方最大級の青銅製大日如来（大仏）があります。高平山遍照寺の成立や、高平山大仏建立の経緯を紹介しながら、西楽寺の、地域との関わりや地域振興の活動を紹介します。



高平山遍照寺の成立と

開山 木食秀海

最も信頼できる

高平山成立期を伝える史料

延宝三年（一六七五）八月十五日に作成された『西楽寺本末帳』で、初めて高平山遍照寺は、西楽寺の「門徒」として寺社奉行に届け出られました（西楽寺文書近世八〇三号、一〇一四号）。

近世新義真言宗という「門徒寺院」とは、印可法流を相承していない、剃髪や護摩ができないお寺のことです。

延宝三年の登録を受けて、延宝五年（一六七七）に、遍照寺の検地が行われました（西楽寺文書近世一〇一四号）。

この検地にもない、延宝六年（一六七八）二月十一日、西楽寺から、中泉代官松平市右衛門の手代、浅井十左衛門に、「高平山遍照寺由緒」（西楽寺文書近世六号）という文書が出されました。要するに、「この、新しく登録されたお寺はどんなお寺？」という調査です。

「高平山遍照寺由緒」は、作成された経緯や書かれた年代から、高平山遍照寺の成立を伝える史料の中で、最も信憑性の高い史料だと考えられます。文面を詳細に読んでみても、問題はなさそうです。

「高平山遍照寺由緒」には、以下のようなことが書かれています。

①元和元年（一六一五）に、木食秀海という人物が、高野山から弘法大師像を持って山梨（袋井市の地名）にやってきて、ここに大師堂を建てたい、と近隣住民に交渉した。

②飯田村の領主、青山大蔵の許可が出たので、高平山という山に大師堂を建てた。

③木食秀海は、寛永二十年（一六四三）に亡くなったが、後のことは西楽寺に頼みたいと言ったので、西楽寺が高平山遍照寺を管理することとなり、高平山を「奥院」と名付けた。

十七世紀初頭の、高野山の木食、と言えば、豊臣秀吉から高野山を救った、木食応其（もくじきおうご）／一五三六〜一六〇八）が思い起こされます。秀海は、応其の弟子筋にあたる人物かもしれません。

また、この史料からは、高平山が、秀海の遺言で西楽寺の「奥院」となったことも分かります。

ちなみに、遍照寺住職は西楽寺住職の兼帯となつたようです（西楽寺文書近世一〇一四号）。

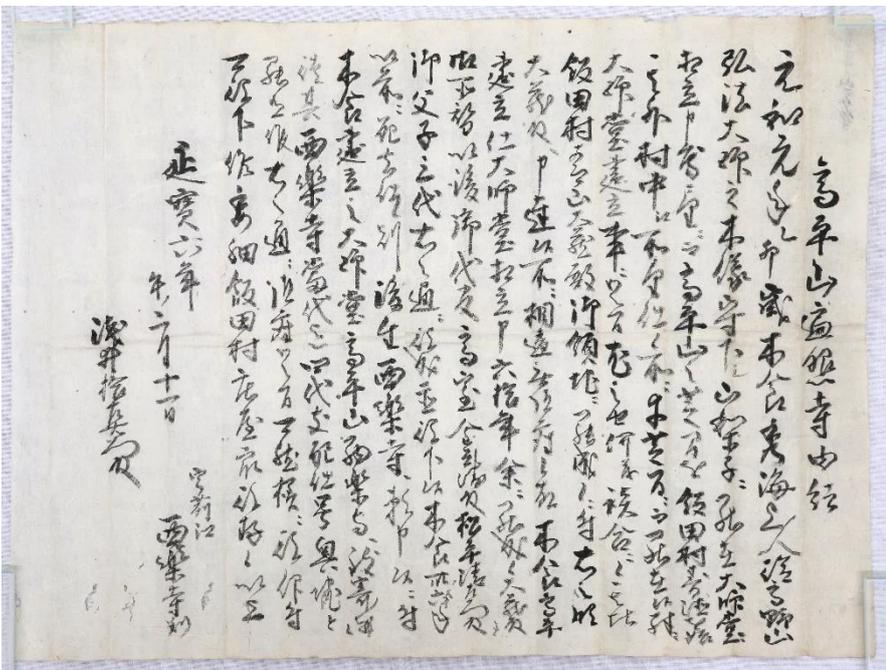
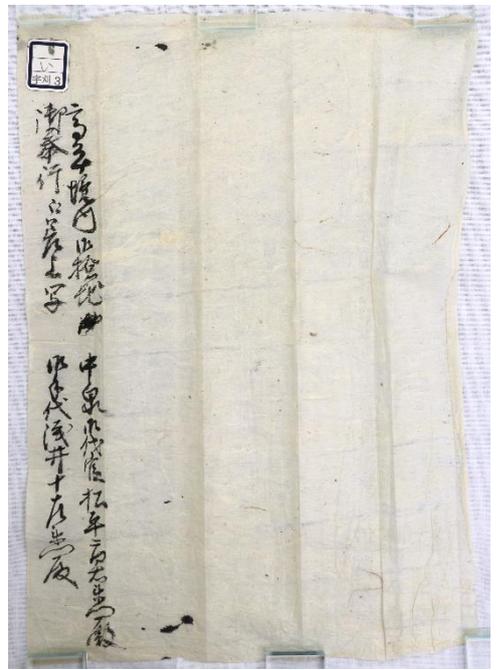


〔木食秀海墓石 右〕

（一六九三）
元禄六癸酉七月八日
（ア）当山開基木食上人
乃至法界平等利益

〔木食秀海墓石 左〕

（一六四六）
正保三年
（ア）開山法印秀海上人不如意
酉七月八日



「高平山遍照寺由緒」

西樂寺文書 近世六号

(包紙上書)

「高平境内御檢地」 中泉御代官松平市右衛門殿 御奉行江差上写 御手代浅井十左衛門殿

(端裏書)

「高平山書付」

高平山遍照寺由緒

元和元年乙卯歲木食秀海上人從二高野山一弘法大師之木像守下シ、山梨子ニ罷在、大師堂ニ相立申度望ニ而、高平山之芝間を、飯田村寿徳を始、其外村中江所望仕候所ニ、平芝間ニ罷在候。殊ニ大師堂建立事ニ候間尤之由、何談合ニ候。其比飯田村青山大藏殿御領地ニ罷成候ニ付、右之段大藏殿へ申達候所ニ相違無ニ御座ニ候故、木食高平建立仕、大師堂相立申、六拾年余ニ罷成候。大藏殿御取替以後御代官高宝金兵衛殿、松平清左衛門殿御父子三代右之通ニ被ニ成置一被レ下候。木食卅六年以前^(寛永二十年一六四三年)死亡仕候刻、後生西樂寺へ頼申候ニ付、木食建立之大師堂高平山西樂寺へ致ニ寄進一候。從レ其西樂寺当代迄四代支配仕、号奥院と罷有候。右之通ニ御座候間、可レ然様ニ被ニ仰付一可レ被レ下候。委細飯田村庄屋衆被レ存候。以上。

延宝六年

宇刈郷

午ノ二月十一日

西樂寺判

浅井捨左右衛門殿

【語注】

※木食 十穀を断つて、木の実・草の実だけを食するという難行(木食行)を行う人のこと。

【重要参考史料】

- 1、「高平山遍照寺由緒」(西樂寺文書近世六号)
2、『当山諸由緒扣』(西樂寺文書近世一一号)
3、『遠江国周智郡宇刈之郷西樂寺本末帳』(西樂寺文書近世八〇三号)
4、「乍恐口上書を以御訴詔〔訟〕申上候」(西樂寺文書近世一〇一四号)

※史料表題が「」で括られているものは文書、『』は冊子の史料。「」は、表題が無かったため、史料紹介者が表題を付けたもの。以下同。

【参考文献】

- 1、柳田良洪『真言密教成立過程の研究』(山喜房佛書林、一九六四年)。
2、平岡定海『日本寺院史の研究 中世・近世編』(吉川弘文館、一九八八年)。
3、山中豊平・山中真喜夫編『遠淡海地志』(一九九一年)。
4、山本義孝「天台宗・真言宗の動向」(森町史編さん委員会編『森町史 通史編 上巻』第四編第八章第二節、森町、一九九六年)。
5、前田正明「概説 木食応其 ―秀吉から高野山を救った僧―」(和歌山県立博物館編集・発行『特別展「没後四〇〇年 木食応其 ―秀吉から高野山を救った僧―」二〇〇八年)。

高平山遍照寺を発展させた三人の重要人物

宥香・尊昭・木食直心

宥香 ? ~ 一六八四

西楽寺五世住職。奥州岩城御宝殿の生まれ(生年不明)。万治元年(一六五八)以前に西楽寺住職となり、延宝元年(一六七三)に高平山に隠居。貞享元年(一六八四)十二月二十三日に死去(西楽寺文書近世一一号、五四号)。

遍照寺に隠居していた時に、遍照寺の焰魔堂(骨堂)、本堂を建立(西楽寺文書近世一一号)。また、延宝七年(一六七九)八月二十一日に法華経供養を行っている(高平山大仏脇法華経供養塔)。

高平山に隠居している時に、高平山を、西国十三所の観音巡礼のように整備したらしく、宥香存命中は、連日、貴賤、僧俗、男女を問わず参詣者が高平山にやってくるという(西楽寺文書近世二三号)。高平山大仏蓮弁銘文には、宥香は高平山の「中興開山」だと刻まれている。尊昭は、宥香の手腕を高く評価していたらしい。

『高平山大仏建立施主附写』(西楽寺文書近世三一一八号)を見ると、現森町の谷中の人と、現掛川市の細谷の人が、宥香のために寄付している(当時宥香は故人)。地域に親しまれた人だったらしい。

尊昭 ? ~ 一七二八

西楽寺八世住職。「西楽寺中興」と呼ばれる。北越(越後)新潟を指すことが多い)の生まれ(西楽寺文書近世一二号、二三号)。

元禄十六年(一七〇三)に、西楽寺住職宥弁が隠居したことにより、翌年(一七〇四)西楽寺住職となった(西楽寺文書近世一一号)。

宝永元年(一七〇四)に、剃髪を求めてきた北越出身の人物を、同郷のよしみで弟子として、直心と名付け、高平山弘法大師堂の堂守とした(西楽寺文書近世一二号、二三号)。

宝永地震(一七〇七)により被害をうけた西楽寺一山の復興に当たる(西楽寺文書近世一一号)。

西楽寺一山の復興が一段落したところで、直心とともに、本格的に高平山の整備に乗り出し、西国十三所の観音建立(正徳三年Ⅱ一七一三)や高平山大仏の建立を成し遂げる(享保三年Ⅱ一七一八)。その背景には、宥香の業績に対する高い関心があったらしい(西楽寺文書近世二二号、二三号ほか)。

享保十三年(一七二八)八月二十六日死去(西楽寺文書近世五四号)。

木食直心 ? ~ ?

北越の生まれ。江戸に出て来たものの、身上をつぶし、宝永元年(一七〇四)に江戸から遠州の安養山西楽寺に来る。そこで尊昭に剃髪を願い出る。同郷のよしみで尊昭の弟子となり、直心と名付けられ、高平山大師堂の堂守となる(西楽寺文書近世一二号、二三号)。

後に木食となり、正徳元年(一七一)に高平山の焰魔堂(骨堂)、本堂を修復。正徳初年から西国十三所の観音建立に着手、正徳三年(一七一三)に成就(西楽寺文書近世一一号、二三号)。

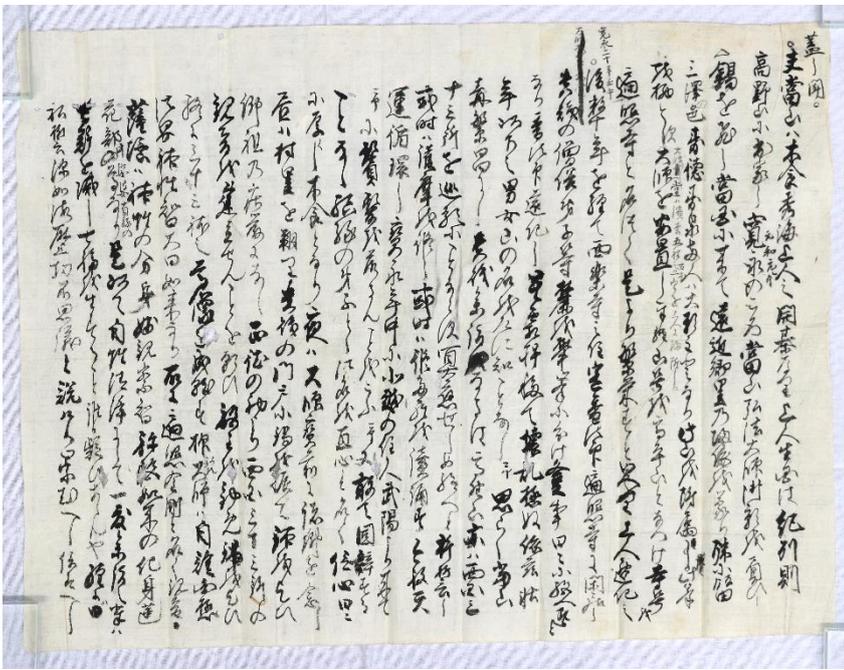
後、勧進を行い、享保三年(一七一八)二月十七日、高平山に大仏を建立する(高平山大仏)。

享保三年七月に、高平山の寺庵を建立するため、尊昭に無断で願成寺(西楽寺の隠居所)周辺の木を二十本ほど伐採したことがきっかけで、翌享保四年(一七一九)二月十九日までに、尊昭から師弟の縁を切られ、高平山に居住してはならないと役所に命じられる(西楽寺文書近世二二号)。

〔高平山縁起下書〕 西楽寺文書近世 23 号

高平山の縁起(歴史)を書いた下書。縦 287mm × 横 380mm。年月日、作成者等不明だが、文章中に、「木食直心を弟子にした」とあるため、執筆者が西楽寺第 8 世住職尊昭だと分かる。

高平山に隠居していた宥香が、高平山を西国三十三所の観音巡礼のように整備し、大勢の参詣者を集めたことや、尊昭が宥香の路線を継承して高平山を整備しようとしていたこと、江戸から北越出身の人物が来たので、出家させ直心と名付け、高平山の整備を任せたことを記す重要史料。下の翻刻は文字組みを整え読みやすくしたもの。



〔高平山縁起下書〕

西楽寺文書
近世二三号

蓋し聞、夫当山ハ木食秀海上人之開基なり。上人生国は紀州。則高野山に出家し、元和元年当山弘法大師御影を負ひ、錫を飛ばし、当国に来て遠近郷里之帰依を蒙り、殊に飯田・三沢の邑寿徳・寿泉兩人ハ大願主となり、此山を附屬し、此峯を栖とす。大師堂は浜松五村之古屋一字を上人に帰附し而、「大師／翻刻者補」を安置し奉る。山号を高平山となづけ、寺号を遍照寺と名づく。是より繁栄すといへり。上人遷化之寛永二十年壬午後、数十年を経て西楽寺之住有香法印遍照寺に閑居し、貴賤の僧俗・弟子等麓を挙ヶ峯に分け、登事日とに絶へすとなり、香法印遠紀之星霜捍移て壊乱極ぬ。依レ茲壯年以下之男女山の名をたに知ことなし。予思らく当山口繁昌にし、貴賤参詣■なるは、高野山亦ハ西国三十三所を巡願にことならず、冥応せしめ給へと許誓之、或時ハ護摩を修し、或時ハ修多羅を誦誦す。今般天運循環し、宝永年中に北越の住人武陽より来て、予に鬢髪を落さんことをこふ。予又敢て固辞することなし。結縁の弟子とし、法名を直心と名く。信心日とに厚くし、木食となり、夜ハ大師宝前に諸仏を念し、昼ハ村里を翔り。貴賤の門戸に錫を振て鉢を乞ひ、仏祖の莊嚴になし、正徳の初より西国三十三所の観音を建立せんことを願ひ、□主を勤め鉢を乞ひ、終に三十三鉢之尊像を成就す。抑弘法大師ハ自証□□法界本性智大日如来なり。故に遍照金剛と名く。観音■薩像ハ鉢性の分身、妙觀察智□□如来の化身、蓮花部中娑婆有縁の尊なり。是以て自性清浄にして、一度参詣之輩ハ七難を滅し、七福を生ずること、誰か疑ひあらんや。経にハ■弘誓源如海歴功不思議と説けり。崇むへし、信すへし。(後欠か)

西楽寺の地域活動の拠点、高平山

宥香が整備し、尊昭がその路線を引き継いだ高平山は、遠近から様々な人が集まる場所でした。宥香や尊昭が高平山に関心をもち続けた理由は何んででしょうか。

高平山は、宥香、尊昭の後、幕末まで、御影供や開帳などのイベントが行われる会場であり、多くの人々を集め続ける場所でした(西楽寺文書近世一四号、一〇一八―二号)。

そしてそこでは、勧進などの活動が行われていました。

高平山は、人々を集め、西楽寺が地域と関わる活動を行う拠点として整備されたようです。

【重要参考史料】

- 1、『当山諸由緒扣』(西楽寺文書近世一一号)
- 2、『直心訴訟一件断簡』(西楽寺文書近世一二号)
- 3、『一とつの鐘鑄造のための寄附依頼文』(西楽寺文書近世一四号)
- 4、『高平山縁起下書』(西楽寺文書近世二三号)
- 5、『住職実名年月取調書』(西楽寺文書近世五四号)
- 6、『乍恐口上書を以御訴詔申上候』(西楽寺文書近世一〇一四号)
- 7、『勸化帳』(西楽寺文書近世一〇一八―二号)



高平山大仏の建立と

西楽寺の地域活動

大仏建立

享保三年（一七一八）二月十七日、高平山に大仏が建立されました。願主は木食直心、点眼は西楽寺住職尊昭です。六角堂の大仏殿もあつたようです。

下の年表を見ると明らかのように、尊昭は住職となつてすぐに高平山の整備を開始しましたが、宝永地震により復興に集中せざるをえなくなり、高平山整備が中断してしまいました。

復興の目途が立った正徳の頃から活動を再開します。享保三年の大仏建立は、遍照寺の建物修復、三十三所の観音建立などの、一連の整備の仕上げとして行われた活動のようです。

尊昭は宝永三年（一七〇六）に西楽寺本堂東前の十所権現を建て替えています（西楽寺文書近世一六五五号）、これは、既にこの時大仏建立を計画しており、大仏殿鎮護のために整備したのではないかと考えられます。

十八世紀初頭、尊昭に大仏建立のひらめきを与えたものは、同時期に行われていた、東大寺の大仏復興だったのではないのでしょうか。

永禄十年（一五六七）、兵火によって消失した東

大寺大仏と大仏殿は、東大寺の公慶とその後継者たちの尽力により、元禄五年（一六九二）に大仏再興、宝永五年（一七〇八）に大仏殿再興を実現しました。

再興に先立つ元禄十四年（一七〇二）、東大寺の大仏は、全国的に年貢のようにお金を集める寄付の仕組みになりました。

この仕組みは、研究者によっては、全国的に大仏復興の知名度を上げる結果になった、と評価する向きもあります。

江戸時代の東大寺大仏復興は、観光や地域振興の観点からも研究されています。尊昭は、宥香の頃の高平山の賑わいを再現したいと考えていました。

そんな折に耳に入った大仏再興。尊昭に、高平山整備の仕上げとして、大仏を建立しようという発想が生まれても、不自然ではないように思います。

ところで、『高平山大仏建立施主附写』を見ると、ほぼ、寄付金を集金した順番に村々が配列されているようです。

西楽寺と高平山の周辺で集金した後は、北上して森町の方へ。森町の北から二俣

へ行き、磐田や浜松へ。東へは、東海道を通って愛野から掛川、菊川へ。当時の道を活用した勧進活動です（この段落は現在の地名で書いている）。

年月日	事項	根拠史料
延宝元年（1673） ～貞享元年（1684）	宥香、高平山に焰魔堂（骨堂）と本堂を建立。	『当山諸由緒扣』（11）
宝永元年（1704）	尊昭、西楽寺第8世住職となる。	『当山諸由緒扣』（11）
宝永元年（1704）	江戸から、身上をつぶした北越出身の人物が来て、西楽寺尊昭の弟子となり、「直心」と名付けられる。	〔高平山縁起下書〕（23） 〔高平山之様子〕（1012）
宝永3年（1706）	尊昭、西楽寺境内十所権現を建て替える。	〔十所権現棟札下書〕（1655）
宝永4年（1707）10月4日	宝永地震。西楽寺一山が被害を受けたため、尊昭はその復興に尽力することとなる。	『当山諸由緒扣』（11）
正徳元年（1711）	この年までに、西楽寺一山の復興に目途が立った。	『当山諸由緒扣』（11）
正徳元年（1711）	木食直心、高平山の焰魔堂（骨堂）と本堂を再建。	『当山諸由緒扣』（11）
正徳初年（1711年頃）	木食直心、西国三十三所の観音の建立に着手。	〔高平山縁起下書〕（23）
正徳3年（1713）2月	木食直心、西国三十三所の観音（工匠角左衛門）を成就。点眼。	『当山諸由緒扣』（11）
享保3年（1718）2月17日	高平山大仏建立。	『高平山大仏建立施主附写』（3118） 『高平山大仏建立銘文写』（3121）
享保4年（1719）2月19日	木食直心、高平山を追放される。	〔直心訴訟一件断簡〕（12）

表：高平山大仏建立関係年表

【凡例】

1、「根拠史料」欄の、史料名の後ろの（ ）内の数字は、西楽寺文書の文書番号である。





正面

高平山大仏（青銅製 胎蔵大日如来坐像）

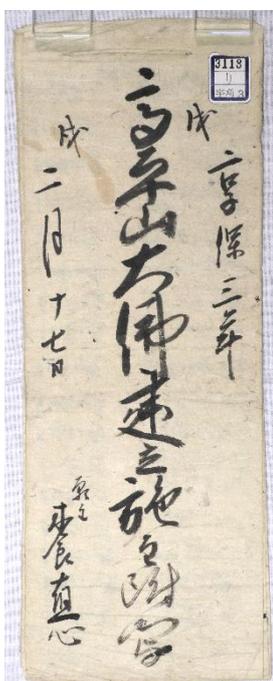
総高	4.06m
像高	3m
台座高	1.06m
建立年	享保3年（1718）
願主	木食直心
点眼	尊昭（西楽寺住職）
木形仏師	木村主計
駿遠両国鑄物師惣大工（監修）	山田七郎左衛門尉藤原種満（森町住）
鑄物師御大工	太田近江藤原正次（江戸住）
小工	豊満九郎兵衛教春 田中太右衛門尉 岩崎戸兵衛尉次重



側面（左から）



背面



『高平山大仏建立
施主附』（西楽寺文
書近世 3118 号）

【重要参考史料】

- 1、『高平山大仏建立施主附写』（西楽寺文書近世三二一八号）

【参考文献】

- 1、平岡定海『日本寺院史の研究 中世・近世編』（吉川弘文館、一九八八年）。
- 2、山中豊平編著・山中真喜雄編『遠淡海地志』（一九九一年）。
- 3、西山厚「公慶上人の生涯」（G B S 実行委員会編『ザ・グレイトブッダ・シンポジウム論集第四号 論集 近世の奈良・東大寺』東大寺発行／法蔵館制作・発売、二〇〇六年）。
- 4、平岡昇修「奈良の復興は大仏再建から——江戸中期の奈良に賑わいをもたらした「勸進」と「寄進」——」（『EURO-NARASIA』5、二〇一六年）。



高平山大仏

蓮弁銘文翻刻（抄）

①

一色村 富永吟夕

金五両為六親眷属

同内室

金式分 盛屋妙栄大姉
相雲宗梧居士

同内室

観窓妙音童女

同一両式分梅心禅童子 一宮

金五両為六親眷属也 伊藤孫三郎

自発願成就迄

金三百五拾五両三分式百文

金銀米鉸下金 上来者銘文之外也
等志施主所願 成就所

我覚本不生 出過語言道

諸過得解脱 遠離於因縁

知空等虚空^文 願以此功德 普及於一切

我等与衆主 皆^{悉力}成仏道

遠州山名郡飯田村

高平山遍照寺兼帯之住

西楽密寺法印尊昭大和尚 十之介
点眼之訖 当山驅使 藤七郎

②

享保第三戊戌年二月十七日

飯田村

発叟勇徳居士

当山開山木食秀海上人

同中興開山法印有香

金輪上皇天長地久

天下泰平五穀成就

願主安寧郷内繁昌

上野軍大夫

萬民豊楽殊別者

③

護持檀越多少貴賤

二世願望皆悉成弁祈禱所如件

奉建立丈六大日如来第願主

安養山西楽寺八葉法印尊昭弟子

当山 木食直心

木形仏師木村主計法橋

駿遠両国鑄物師惣大工

森町住 山田七郎左衛門尉藤原種満

鑄物御大工江戸住

太田近江藤原正次造之

小工

豊満九郎兵衛教春

田中太右衛門尉

岩崎戸兵衛尉次重

護持施主御連名次次第不順



蓮弁の位置と銘文対応図

袋井市歴史文化館令和二年度企画展

中遠の古刹 真言宗西楽寺Ⅱ 高平山

期間：令和三年二月一日（月）～四月三十日（金）

会場：袋井市歴史文化館（袋井市浅名一〇二八番地）

電話：〇五三八―二三一九二六九（月～金）

